



## トピックス 各教室の現状

緊急事態宣言で各教室の活動も以下の通り中止を余儀なくされてきましたので、**雲の手通信**もやむなく6月号を休刊としました。

**亀戸スポーツセンター教室**； 1月から3月中旬まで臨時教室の形態で定員いっぱいの50名によって開催しました。4月からは中止が続きましたが、ようやく6月第4週から臨時教室と自主教室の2本立てで再開されました。

**東大島鶴の会**； 1月から4月までは開催しましたが、5月から6月末まで中止、7月から再開。

**早朝太極拳の会**； 野外での練習なので1月以降も休むことなく開催しました。また有志による「わかき公園」での早朝練習も月、木の週2回開催しております。

以上ですが、どの教室も今年に入って参加者が増えているのは、たいへんうれしいことです。

## 閑人閑話 蟄居のおかげでユーチューブを知る

コロナが長引いて様々な活動が制約され家で蟄居する時間が増えました。ということでパソコンに向き合う時間もだいぶ増えてきて、ユーチューブを見るようになりましたが、これがいろいろと探しながら見られるのでたいへん便利でおもしろいですね。藤井聡太君の将棋の名勝負の中継や棋譜解説、格闘技やボクシングの映像、太極拳や中国武術の映像、中国の豪雨災害の最近の映像、世界各地の絶景の映像などなど、観ているときりがありません。

その中でも、とくに気に入って次々と観ているのは高齢の日本人Y氏夫妻によるスイス旅行の動画です。大変裕福な方のように長い日程でスイスをくまなく巡って、その美しい風景を次々と紹介しているのですが、ご主人のカメラワークと編集技術が素晴らしく上手で、また山岳名や時間経過のテロップなどもきめ細かく入っていて、画像はきれいで、かつ参考にもなるという優れたものです。

スイスには何度も行きましたので、その時の思い出と重ねながら観ていますが、懐かしさが募るばかりです。とくに2002年8月には妻と二人での、グリンデルワルド6泊【下；その時泊まった駅前ホテル・ダービー】、シャモニー4泊の個人旅行が、懐かしく思い出されます。グリンデルワルド(標高1034M)はスイスでは1,2を争う人気のリゾートです。アイガー(3970M)、メンヒ(4099M)、ユングフラウ(4158M)といった名峰の山すその街です。

日本で言えば穂高連峰を仰ぐ上高地(標高1500M)といったところでしょうか。ちなみに両地は姉妹都市協定を結んでいます。ただし、上高地は、バスとタクシーだけが乗り入れできる交通機関であり、宿泊設備も10軒ほどと限られていて、しかも冬季は閉鎖されてしまっていますが、グリンデルワルドは登山電車が乗り入れているうえに、ロープウェイ、登山リフト、登山バスなどの便もよく、また乗用車、観光バス、オートバイ、自転車の往来も自由です。冬季はまたスキーリゾートとして賑わいます。なんととってもアイガーの中腹を削り貫いてユングフラウの肩(3454M)



に展望駅を置いたユングフラウ鉄道にはどぎもを抜かれます。村には多くのホテル（多分 150 軒以上）やヒュッテがあり、またレストランも多くあります。

これを、上高地に置き換えてみるとこうなります。まず松本駅から山岳鉄道が上高地の中心地の河童橋まで通じていて、さらに河童橋から奥穂高岳 (3100M) の山腹をトンネルで貫いて登山電車を走らせ、頂上直下の岩峰に展望台を兼ねた駅がある、そのほか、西穂高岳 (2909M) の丸山 (2462M) あたりまで、あるいは反対側の六百山 (2450M) の頂上までそれぞれロープウェイが掛かっている、大正池から河童橋、明神池経由徳沢まで小型の電気バスや観光馬車が巡行している、帝国ホテルあたりから河童橋まではホテル、レストラン、商店などが軒を連ねている、といったこととなりますが、いかがでしょうか。

日本では国立公園などについては自然景観を守るために、現状変更は基本的には認められないのが大前提ですし、また公園内には街や集落、山林、農地、ダムなども含まれますから、ほとんどすべての省庁の利害が絡み合っていることもあり、観光促進のための施策を総合的、積極的に打つことができない現実がずーっと続いているのです。いったい誰のための“公園”なのでしょうかね。

これに対して、市民の誰もが、子供やお年寄りまで、あるいはサイクリストや海外の旅行者にまで、安全に山や高原の魅力を楽しむことができるように、交通インフラや宿泊、商業施設を常に用意し、また充実させ続けているのが、スイスの観光政策というものです。ちなみに、グリンデルワルドまで登山電車が開通したのは、なんと今から 130 年前の 1890 年 (明治 23 年)、ユングフラウの肩までの登山電車が開通したのは 1912 年 (大正元年) ということですから、すごいですね。

話がいささか脱線してしまいましたが、ということで、今日もまたユーチューブのスイス観光動画を楽しんでいます。

## 左顧右盼 第 24 話 仏教の変遷と伝播の不思議を探る (第 8 回)

～あなたは何を拝んでいますか？ お釈迦様？観音菩薩？それとも不動明王？～

### 第 3 部 小乗仏教と大乘仏教 第 3 章 大乘仏教の誕生とその多様性【続き】

#### 3-8 弥勒菩薩の不思議

観音菩薩とともに早期に出現したのが弥勒菩薩です。弥勒三部経によると、弥勒は現在仏であるゴータマ・ブッダ (釈迦牟尼仏) の次にブッダとなることが約束された菩薩 (修行者) で、ゴータマの入滅後 56 億 7 千万年後の未来にこの世界に現われて悟りを開き、多くの人々を救済するとされています。それまでは兜率天で修行 (あるいは説法) しているといわれ、とくに中国・朝鮮半島・日本では、信仰されました。

梵語のマイトレイヤーを音訳したものとされていますが、ゾロアスター教などの太陽神「ミスラ」に由来するのではないかという説があります。アーリア人がインド、イランへ来る前から信仰していた古い神様がミスラ (ミトラ) とされています、インドではあまり伝承されなかったようですが、イラン (ペルシャ) では、ゾロアスター教の中で、英雄神、太陽神として広く信仰されてきた神様です。また、2 世紀ごろのローマでもミトラス教として信仰が広まっていた、その神像【上 ; 2 世紀ごろ、大英博物館所蔵】が弥勒菩薩の原型であるとの説もあります。





さらにはミスラはヘブライ語のメシアに相当するという説まであります。メシアは救済者の意味で、ギリシャ語ではキリストです、まさに「イエス・キリスト」と同じ意味になります。“救済者が将来あらわれて人々を救う”と言うキリスト教の原理にそっくりなのが弥勒菩薩の下生説



なのです。

左は京都広隆寺の弥勒菩薩像（国宝）です。右は、中国杭州の禅寺の靈隱寺の有名な弥勒菩薩像（布袋様）で、下生したときの像とされています。



\*兜率天はいわゆる浄土とは全く別の、修行中の菩薩たちが住んでいる場所とされ、右下のようなイメージ図があります。一番下がいわゆる須弥山で、その上空が

天界で、第4天界が兜率天だそうです。ちなみに須弥山は、インド神話でのスメール山の音訳ですが、意識では妙高山です。チベットのカイラス山がしばしば須弥山に比定されます。その守護神はシヴァ神です。

中国では、今すぐ弥勒菩薩が下生するという、いわば革命待望論が幾たびか起きて、革命派の心の拠りどころ、結集力となっていました。

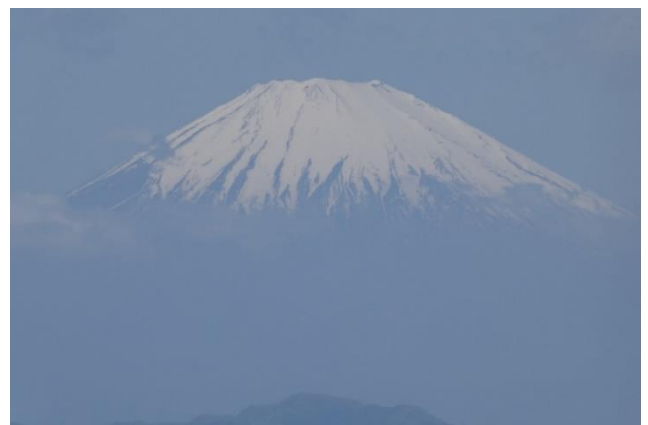


【お詫びと訂正；前回掲載分の末尾に、誤って\*以下を挿入しましたが、今回掲載の文脈が正しいので、お詫びして、再掲します。】

## 観る・撮る・詠う 川瀬巴水展を觀に平塚へ行く

久々に川瀬巴水の特別展が開かれるとあって、緊急事態宣言中ではあるものの、4月27日に、「平塚市美術館」まで出かけて、事前に調べておいた、「湘南平」という絶景の公園と合わせて楽しんできました。

当日は早めに家を出て東京駅発7時28分の東海道線に乗り、8時27分に平塚駅到着。9時発



のバスで湘南平まで20分そこそこで到着。標高わずか180mの丘ですが、四方すべてが見渡せる絶景の地でした。南には相模灘がいっぱいに広がり、江ノ島、三浦半島、正面には大島がかすんでいて、西へ目を転じれば伊豆半島から箱根の連山、そして真っ白な富士山【上】が雲の上にそびえています。



す。北には丹沢山塊が横たわり、大山が均整のとれた姿で立っています。**【左】**市民のハイキングコースでもあるようで、大磯や平塚市内から歩いて登ってきている人もあるようです。いまはつつじが満開でしたが、桜の季節には車の乗り入れ制限があるほどの人気の花見の場所でもあるようです。頂上の売店で名物の“おでんラーメン” 500 円を買って、外のテーブルで富士山を眺めながらの優雅なブランチ。

昼過ぎにはバスで駅に戻り、バスを乗り換えて、超モダンな平塚市美術館**【左上】**に入館。今回の「川瀬巴水特別展」は地元出身の実業家である荒井寿一氏のコレクションで、版画や水彩画 130 点以上が時系列的に解説されながら展示されています。また版画以外に雑誌の表紙や口絵、新聞や雑誌の連載小説の挿絵、役者絵、切手、カレンダーと彼の多才な画業を知ることができたのも大きな収穫でした。とくに永井荷風の小説『腕比べ』の挿絵の、風景版画とはまったく別の、艶っぽさには驚きました。

ともあれ、“夕暮れ巴水”とも、“旅情詩人”とも称された川瀬巴水の多才多様な作品を多数観ることができて、はるばる来た甲斐があった今回の平塚でした。

**【右；戦後の作品中の傑作とされている「増上寺の雪」・会場にて撮影】**



コロナ禍の東京逃れて万緑の湘南平に憩うひととき  
雲切れて富士高々と浮ぶなり箱根連山わきに從え  
大島をはるか南に浮かばせて逆光の海穏やかに風ぐ  
丹沢の峰々見れば思い出す半世紀前の友との山行  
雨も良し雪はなお良し夜景ならさらに巴水の郷愁深まる  
忍び寄る闇を巧みに描きしが “夕暮れ巴水” と呼ばれる由縁に

**一品・一葉・一会** 第 31 回 飛来地不詳のコウノトリ 1998 年ごろ

もう 20 年以上も前から、自宅のパソコンデスクの上でゆらゆら揺れているのが、このコウノトリのモービルです。水中の魚を狙って首を伸ばしているのですが、もちろん永遠に捕まえることはできません。それでも終日ゆらゆらゆらゆら…、心の和むモービルです。

確か、ベトナムから帰国したときに持って帰ったものだと思うのですが、どこで買ったのやら、ベトナムか、カンボジアか、それともタイだったのか、今となっては全く思い出せないのです。

どこから飛んできたのかい？と聞いても、相変わらず、ゆらゆらゆらゆら…、気持ちの和むコウノトリです。

